黙示録11章 「偉大な力の証し」

1A 二人の証人 1－13

1B 異邦人に与えられた外庭 1－2

2B 律法の回復 3－6

3B 預言者の死の祝い 7－10

4B よみがえりと昇天 11－13

2A 第七のラッパ 14－19

1B 王となられたキリスト 14－18

2B 契約の箱からの稲妻 19

本文

黙示録 11 章を開いてください。私たちは前回、10 章で、力強い御使いが天から降りてきて、開かれた巻物を右手に持っていた場面を見ました。それはまぎれもなく、主が天から地上に戻ってこられる姿を表しています。そして、御使いが叫びました。「神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。（7 節）」これまでも、ヨハネは、預言者たちが告げたことについて、その幻を見て、また聞いて書き記しました。けれども、これからのことは、預言者たちが集中的に語った、終わりの大患難のことです。ダニエルの預言における、荒らす忌まわしい者が聖なる所に入り、自分を神とすることです。主ご自身がオリーブ山でこれを弟子たちに語られ、また使徒たちが、教会の人々にしっかりと教えていたことです。

そして、この巻物を食べなさいと、ヨハネは御使いに命じられます。それで食べたら、口には甘いが、腹には苦かったのです。主が栄光と力で戻ってこられることは、甘いですが、そこに至るまでの苦しみは苦いのです。そしてこれらは、全世界の人々に関わることです。

1A 二人の証人 1－13

1B 異邦人に与えられた外庭 1－2

1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そ
こで礼拝している人々を測りなさい。2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけない。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。

今、使徒ヨハネが、いわゆる、ものさしが与えられます。エゼキエルの預言に、主はご自身が戻られた後、ご自身の栄光を戻す神殿の幻をエゼキエルにお見せになりました。その時、エゼキエルを、その敷地を案内する御使いが、測り竿をもっているのを見ます（40:3,5）。今、ヨハネも同じように、測り竿が与えられています。

そして、エゼキエルの預言にある、栄光に輝く、回復した神殿かと思いきや、外庭については、「異邦人に与えられている」と言います。「そのままにしておきなさい」というのは、「外に投げなさい」というのが直訳のようです。しかも、四十二カ月、つまり三年半の間、異邦人たちが踏みにじる、ということなのです。

これは、明らかにダニエルの七十週の預言のことを指し示しています。ダニエル書 9 章において、ダニエルは、エレミヤの預言で間もなく、ユダヤ人たちがエルサレムに帰還することを知りました。それで、徹底的に悔い改めの祈りを献げていました。そして、神の憐れみによって、荒れ果てたエルサレムの回復を願っていました。すると、ガブリエルが来て、確かに、ユダヤの民と聖なる都について七十週が定められていると教えました。七十週が満ちれば、聖所が回復されます。ここでの週は七年間のことです。

しかし、そこには、大きな横道があります。それは、油注がれた方、すなわちキリストが来られるのだけれども、それは七週と六十二週の後、すなわち、483 年が経つと、油注がれた者は断たれて、彼には何も残らないと教えるのです。城壁の再建命令が出たのは、ネヘミヤ記に出てくる、アルタクセルクセス王によるもので、紀元前 445 年です。その 483 年後は紀元後の 32 年です。主がその時に、エルサレムにろばの子に乗られて、入城されました。人々が、ホサナと叫んだ日のことです。「詩篇 118:24-25 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。ああ【主】よ　どうか救ってください。ああ【主】よ　どうか栄えさせてください。」

そこで七十週の預言は、最後の第七十週目を残すだけとなりました。けれども、ここでダニエルの預言は、長い期間を想定したことを書いているのです。「9:26b　次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」ローマが、エルサレムとその神殿を紀元後 70 年に破壊しました。そして、洪水とは軍隊が一気に押し寄せる比喩ですが、終わりまで荒廃が定められていると教えています。

これはなぜか？本当は、家の建てた者たち、つまりユダヤ人の指導者が、自分たちを救われる方キリストを受け入れなければいけないのに、かえって見捨ててしまったからです。先ほどの、ホサナ、救ってくださいという言葉の前に、詩篇には、こう預言しています。「118:22-23 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。23　これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」そう、不思議なことが起こってしまいました。しかし、それも主は想定済みであり、その間に、ご自身が呼んでいなかった諸国の民、異邦人たちが、イスラエルの神とキリストを信じ、受け入れるようにされたのです。

そして第七十週目、最後の七年間が始まるのを、こう記しています。「ダニ　9:27　彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」ユ

ダヤの多くの者は、この荒らす忌まわしい者と堅い契約を結ぶのです。これが、神殿のことにも関わることは明白です。半ばになると、すなわち三年半が経つと、いけにえとささげ物をやめさせるのです。そして、かつてなかった恐ろしい患難が、彼らに襲い掛かるのです。それを解き明かしたのが、主イエスです。弟子たちに、ユダヤにいる人々は一目散に逃げなさいと命じられました。

今、私たちが読んだ黙示録 12 章 1-2 節は、この最後の七年間の前半部分の神殿の姿です。外の庭は異邦人に投げやりなさいということです。後で読みますが、これは神殿の回復のようで実はそうではない、エルサレムはまるでソドムやエジプトのようになっているのですから、霊的には回復していないのです。真実なメシアが来られる前に、偽の救いを彼らが選び取ってしまうのです。

主が、ユダヤ人指導者たちにこう言われました。「ヨハ 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。」偽メシアを受け入れてしまうのです。ゼカリヤも預言していました。「11:16-17 見よ。それは、わたしが一人の牧者をこの地に起こすからだ。彼は迷い出たものを尋ねず、散らされたものを捜さず、傷ついたものを癒やさず、衰え果てたものに食べ物を与えない。かえって肥えた獣の肉を食らい、そのひづめを裂く。わざわいだ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕と右の目を打ち、その腕はすっかり萎えて、右の目の視力は衰える。」

今の情勢を見ると、まさにこのことが起こるのではないか？と感じさせる動きが、ずっとあります。元旦礼拝でお話ししたように、イスラエルの国は、エゼキエルが預言したように、1948 年、苦しみの中で生まれました。今も、その国の存在自体を否定して、攻撃している敵がいます。イスラエルの国は建てられたものの、肝心のエルサレム、その神殿は自分たちのものになっていません。六日戦争、1967 年にイスラエル軍が奪還しましたが、神殿の丘の敷地について、すぐにヨルダンのイスラム当局に明け渡しました。今、神殿の敷地には岩のドームが建っています。

けれども、私たちが聖地旅行に 2022 年に行った時に、ユダヤ教徒の人たちが裸足でその敷地を歩いていました。それは、彼らがそこに神殿が建てられることを願い、祈ってのことです。ユダヤ教の人たちの大半は、神殿はメシアが来られてから回復すると信じています。また、敷地に入るのは、聖なるところなので、聖所の中に誤って踏み入れたらいけないので、入ることさえしません。けれども、一部の人たちは、主が来られる前に自分たちで神殿を建て、それからメシアをお迎えするという考えの人たちがいるからです。

今、もし岩のドームを退けて、神殿を建てようとするものなら、世界戦争が確実に起こります。イスラム教徒が許さないからです。けれども、もしそこが分割されたらどうでしょうか？神殿を岩のドームの真隣に建てて、外庭には岩のドームが建ったままにして、ユダヤ人たちの礼拝するところと、ムスリムが礼拝するところと分けるのです。実は、米大統領がかつて、イスラエルとパレスチナにそうした折衷案を持ち出したことがあるそうです。

2B　律法の回復　３－６

3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」
4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。5 もしだ
れかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼ら
に害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。6 この二人は、預言をしている期間、雨が降
らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度で
も、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

二人の証人について、午前礼拝でもお話ししました。粗布をまとっている二人の預言者です。そして、「千二百六十日間、預言する」と言っていますが、この期間は三年半のことです。（当時のバビロンの暦では、一年は 360 日でした。）そして、これは最後の第七十週の前半部分の三年半です。なぜなら、後で、獣が二人を殺すのですが、それは週の半ばで起こるからです。黙示録 13 章を読むと、それが分かります。ですから、前半の三年半の間です。

主は、最後の災い、究極の裁きを地上にもたらす前に、前もって、ご自身に立ち返るために彼らを遣わしています。4 節には、「彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。」とありますが、午前礼拝で説明したとおり、ゼカリヤの預言に出てくるゼルバベルとヨシュアのことです。けれども、彼ら自身というよりも、彼らと同じような証しを立てるということです。二人は、神殿の再建と回復を願って、再建工事を指揮していました。真実をもって神殿の建て直しが行われればよいのですが、建物が建て直されても、霊的に建て直されていなければ元も子もありません。今、真実な霊的回復がなされていないのに、物理的な建物と、物理的ないけにえに拠り頼んでいる姿を見て、預言しているのです。

そして彼らは、まさにマラキの預言にあるモーセとエリヤの姿です。旧約聖書がどのように終わっているかご存知でしょうか？「4:4-6 あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を覚えよ。それは、ホレブでイスラエル全体のために、わたしが彼に命じた掟と定めである。5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」そもそも、七つの封印のある巻物は、ゼカリヤの預言で、モーセの律法にある呪いが書かれていました。主のことばに背いていることに対する、神の正しい裁きなのです。そして、今、エルサレムで神殿は建てられても、律法には立ち返っていないので、それを二人の証人は預言しているのです。

このマラキの預言を見ると、福音書で、なぜエリヤが来るのを待っていたのかがよくわかります。今でもユダヤ人は、過越の祭りの食事において、エリヤが座るための席を用意して、子どもたちにエリヤが来ているかどうか、探しに行かせる場面を設けています。福音書では、バプテスマのヨハネがエリヤではないか？と思われていました。また、イエスが十字架にかけられている時、「エリ、

エリ、レマ、サバクタニ」と言われたので、「この人はエリヤを呼んでいる」と勘違いしている人たちがいたほどです。（マタイ 27:46-47 参照）

バプテスマのヨハネについては、かなりエリヤに似た働きをしています。風貌もらくだの毛の衣を身にまとっており、似ていました。けれども、ガブリエルが父ザカリヤに言ったように、「エリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。（ルカ 1:17）」であって、エリヤに働かれた御霊の力で預言を行うのであり、エリヤの再来ではなかったのです。ヨハネ本人が、違うと、きっぱりと否定しています（ヨハネ 1:21）。

しかし、エリヤは来るのです。イエスが弟子たちに言われました。「マタ 17:10-12 すると、弟子たちはイエスに尋ねた。「そうすると、まずエリヤが来るはずだと律法学者たちが言っているのは、どういうことなのですか。」11 イエスは答えられた。「エリヤが来て、すべてを立て直します。12 しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることになります。」」エリヤが来て、すべてを立て直すと、はっきりと言われています。しかし、エリヤはすでに来たというのは、エリヤの霊と力で来たということです。

ですから、一人はエリヤ本人なのでしょう。もう一人はモーセ本人かもしれません。やはり、二人の証人が行っていることは、エリヤのしたことと似ていますし、またモーセのしていることに似ています。そして、主イエスがエルサレムに向かわれる時、高い山で栄光の姿に変貌した時、モーセとエリヤが現れました。「ルカ 9:30-31 そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」

彼らは、平和に暮らしている人々に災いをもたらしているのではありません。自分たちの証しに対して、「彼らに害を加えようとする」者たちに、神の正しい裁きが下っているのです。それを聞いて、悔い改めている人々にはむしろ救いと癒し、平和が与えられている事でしょう。しかし、大半がそのことばを受け入れず、むしろ、その存在を煙たがって、それで滅ぼそうとするのです。しかし、彼らの方が災いを受けて、滅ぼされます。

3B 預言者の死の祝い 7－10

7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

午前礼拝で話しましたように、彼らは証言が終わるまでは、害を加える者たちに対して守られていました。逆に、災いが彼らに下りました。けれども、証言が終わったので殺されます。主の時がありました。

そして、獣が、黙示録では初めて出てきます。ダニエルの預言に沿って、預言が与えられています。ダニエル書 7 章において、四頭の獣が現れます。これらは、ユダヤ人を支配してきた諸国で、世界帝国です。初めは、獅子のようで、鷲の翼を付けていました。これはバビロンです。次に、熊に似た獣で、メディア・ペルシアです。それから、四つの頭があり、四つの翼のある、豹のような獣が現れます。ギリシアです。ギリシアは、アレクサンドロス大王の死後、四つ分裂しました。そして、第四の獣が、他の野生の獣では形容できないものでした。恐ろしく不気味で、非常に強かったのです。牙が鉄でした。そして頭に十本の角がありました。

この獣の十本の角の間に、小さな角が出てきます。そして、初めの十本のうちの三本が引き抜かれます。そしてこの角は、人間のような目があり、大言壮語する口があります。これが、ここに出てくる獣であり、荒らす忌まわしい者なのです。ダニエル 7 章 24-25 節にこうあります。「24 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。」これから、かつてのローマ帝国のような帝国の復興が起こります。そこに十の支配権がありますが、そこから一人の王が出てきます。そして三人を倒して、残りの七人は彼に支配権を委譲します。それから、彼は、いと高き方を冒涜します。

そして、聖徒たちを悩ますのです。この聖徒たちは、イスラエルの残された民であり、また患難期にイエスを信じる聖徒たちです。その苦悩は、それぞれ黙示録 12 章、13 章に出てきます。そして、「時と法則を変えようとする」とありますね。これまで古今東西、これが法則であるというものを平気で変えていきます。今も、例えば結婚の定義は古からどこにおいても、男女の結びつきであったものが、今は定義を変えようとしています。そして、「聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。」とあるのです。これが三年半です。第七十週の半ばに、いけにえとささげものを彼はやめさせて、自らを神として、拝まない者たちを殺していくのです。

この獣が、「底知れぬ所から上って来る」とあります。この詳しいことは、黙示録 13 章に出てきます。「13:3-4 その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、4 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」死んだように思われたのですが、傷が治ります。獣は、致命的な傷を負った時に底知れぬ所に落ちていました。9 章に出てきた、悪霊どもが閉じ込められていたところです。しかし、竜である悪魔が、彼を生かして、権威と力、位を与えます。この詳しいことは、13 章を読む時に見ていきましょう。

ここでは、その獣が底知れぬ所から来て、この二人の証人を殺すということで、その後に起こったことが大事です。

[8] 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

この「大きな都」とは、主が十字架にかけられたとあるとおり、エルサレムのことです。二人の証人の主は、イエス・キリストです。この方に仕え、この方の証人となっていました。彼らが、殺された時に、埋葬するのではなく、そのまま死体を野ざらしにしました。しかも、大通りにおいてです。これは、かつて主ご自身が、エルサレムの城壁のすぐ外、ゴルゴダの丘は大通りにあったと思われます。同じようにして、さらし者にされたのです。

そして、都が霊的な理解で、「ソドムやエジプトと呼ばれ」ているとあります。預言者イザヤが、彼が生きていた時代のユダが、不正や罪でいっぱいになっていたので、こう表現していました。「1:10 聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民。私たちの神のみおしえに。」神殿があって、いけにえの儀式が盛んでも、主の命じていることに背き、自分の道を歩み、好き勝手なことを行っていたら、神から遠く離れたソドムと何ら変わることはないということです。

イエスご自身の時代も同じでしたね。エルサレムに向かっていた時に、いちじくの木を見て、実があるかどうか確かめたら、葉はありましたが、実が結ばれていなかったので、イエスは呪われました。すると、根元から枯れていました。それは、イスラエルが、宗教的には盛んでありましたが、霊的には実が結ばれていなかったということです。荒らす忌まわしい者、獣と契約を結んだ後も、同じように実が結ばれていませんでした。

[9] もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。

非常に興味深いことですが、エルサレムで起こったこの出来事を、「もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて」と、全世界の人々が見ているということです。10 章で、ヨハネに対して天からの声が、「あなたはもう一度、多くの民族、国民、言語、王たちについて預言しなければならない。（11 節）」と言っていました。けれども、11 章はいきなり、神殿の敷地を測り竿ではかるように、ヨハネに命じられています。このキャップは、何なのだろうと私は初め思いました。けれども、このエルサレムでの出来事が、実は全世界の人たちの注目の的だったのです。

聖書の世界から分かることがあります。それは、神への礼拝が世界の中心だということです。人の初めは、エデンの園から始まります。神がそこにおられて、人がそこで労働をしていました。しかし、罪を犯したのでそこから追放されました。そして、主はアブラハムを召し出されますが、彼の子孫によって、幕屋を造るように命じられます。異邦人の国エジプトも、主の栄光をその偉大な力で意識せざるを得ませんでした。彼らが、主に祭りをしたいから出て行かせなさいというのが、モー

セとアロンによる、ファラオに対する命令でした。そして、ダビデの息子ソロモンの時代に、神殿がエルサレムに建てられました。周囲の国々が、ソロモンに謁見に来ました。このようにして、エルサレムに神殿があり、イスラエルが神をあがめているところで、世界の人々が関わります。

そして、人の人生もそうです。人は、いろいろなことをします。生活には、いろんな分野があります。けれどもすべては、その人の霊が、神の御霊と交わっているかどうかにかかっています。その人が、御霊と真理によって、神を礼拝しているかどうかにかかっています。その人が何をしているか？ではなく、主の前に出て、自分の心はどこにあるかを知ることから、すべてが始まります。

ですから今、世界の人々が否が応でも、イスラエルやその周辺に注目しなければいけないのは、神がそうされているのではないか？と思います。イスラエルの中心はエルサレムです。そしてエルサレムの中心は、神殿です。ですから、そこで起こることは、全世界の人々に波及するのです。

10 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

興味深いですが、全世界の人々が、死体が大通りに野ざらしにされているのを見て、喜び祝い、互いに送り物を交わしています。このような状況は、ヨハネの時代にどのような形で実現するのか、わからなかったのではないでしょうか？全世界の人がどのようにして、わざわざエルサレムに来て、それを眺めて、互いに贈り物を交わすのでしょうか？今の状況ならば、いとも簡単にできます。インターネットでは、ライブ動画で 24 時間、嘆きの壁の様子を見ることができますし。

そして、彼らがこれだけ二人の証人を憎んでいたのかが、死体を見て、クリスマスのプレゼント交換のように、喜んでいるのですから。かつて、アハブがエリヤのことを憎んでいたように、エリヤさえいなければどれほど良いかとアハブは思っていました。アハブがエリヤを探して会えた時に、「Ⅰ列王 18:17 おまえか、イスラエルにわざわいをもたらす者は。」と言いました。けれども、エリヤは言いました。「18:18 私はイスラエルにわざわいをもたらしてはいない。あなたとあなたの父の家こそ、そうだ。現に、あなたがたは【主】の命令を捨て、あなたはバアルの神々に従っている。」同じように、今、地上のすべての人々は、二人の証言について自分たちの悪が暴かれていたので、非常に憎んでいたのです。

4B　よみがえりと昇天　１１－１３

11 しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。12 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

これは、驚くべきことです。二人の証人は、よみがえり、昇天においても、主イエスを証ししていま

すね。主が三日目によみがえり、天に昇られたように、主は彼らを三日半後に生き返らせ、それから天に昇らせました。しかも雲に包まれて天に上っているところも同じです。

それを見て、証人たちの敵は大きな恐怖に包まれています。存在が消えたと思って喜んでいたのですが、再び現れたのですから、そりゃあ恐ろしいことでしょう。ここに、圧倒的な神の勝利、善の勝利があります。これは死をも、キリストの証しを潰すことができないことの、力強い証しです。私たちは霊的に、よみがえりの力を受け取っています。（Ⅱコリ 4:10-12）

13 そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。

都の十分の一が倒れ、七千人が死んで、ようやくエルサレムの住民が、天の神をあがめるようになります。小さな形ですが霊的復興が起こります。二人の証人が用いられています。彼らが語っていたことが、このような形で彼らがいなくなってからでも力を持っていることを知り、神をあがめています。「神はおられるのだ」という畏怖の念です。

こうして、エルサレムで患難期において、少しずつ霊的に覚醒していきます。こうして、イスラエルが最後に救われることに導かれて行きます。初めは、神のしもべ 14 万 4 千人が、神の印を押されました。そして、ここで、エルサレムの住民から主に立ち返る人々が起こされていきます。次回の 12 章では、このイスラエル人たちについての預言になります。主が、イスラエルの人たちを取り扱い、最後にお救いになる準備をしておられるのです。

2A 第七のラッパ 14－19

1B 王となられたキリスト 14－18

14 第二のわざわいが過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。

8 章から、七人の御使いがラッパを吹き鳴らしています。最後の三つについて、鷲が中天を飛び、こう大声で言いました。「8:13 わざわいだ、わざわいだ、わざわいが来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラッパの音によって。」三回、わざわいだと叫んでいます。

それで、第一のわざわいが、底知れぬところから、さそりのような毒をもった悪霊どもが現れて、人々を五カ月の間、苦しめました。第二のわざわいは、ユーフラテス湖畔につながれていた御使い四人が解き放たれて、二億の軍隊となり、人の三分の一が殺されました。そして、これから第三のわざわいが、すぐに来るのです。

しかし、これから第七の御使いがラッパを吹き鳴らしますが、実はそのわざわいは、15 章にならないと出てきません。預言者たちが語ったことについて、その神の奥義について、あまりにも多く

のことがあるので、いろいろな側面から告げていかなければいけないからです。

それで、まだわざわいが下る、第七十週の前半に、二人の証人が現れて、わざわいが来て滅ぼされないように、悔い改めるように預言したことが書かれていたのです。ゼカリヤ 4 章にある約束、またマラキの預言にあるエリヤの再来についての預言が、成就しなければいけないことをここで教えているのです。そして、ここでは、主は、どんなに人々が悪に傾いていても、そこから立ち返って救われるように、何とかするために最後の最後まで、このように証し人を遣わすのです。

15 第七の御使いがラッパを吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」

第一の御使いのラッパが吹き鳴らされる前は、8 章 1 節で、「子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。」とあります。しかし、ここでは、「大きな声が天に起こって」とあります。この「声」は複数形なので、「声々」と訳してもいいところです。つまり、いろいろなところから大きな声が天で起こった、というような感じです。ラッパの始まりに静けさがあり、数々の災いが下って、最後は、天において歓声が上がっている、ということです。

そして、その歓声は、「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。」というものです。ここの「王国」も、複数形になっていて、「この世の諸々の王国は」というように書かれています。そして、ここでの「この世」という言葉には、「神に反抗している世界」という意味合いがあります。初めは、神が、王としてすべてを支配しておられました。今も、すべてを支配しておられるのですが、神は人の自由意志を重んじるゆえ、アダムが罪を犯して、人々がご自身に反抗し、混乱状態に入っているままにしておかれています。ですから、国々は神に反抗しているのです。

主は、すべての権威を上から与えておられます。国々は、主が立てておられます。「ロマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」けれども、その立てられた権威が、まるで自分自身にその権威があると思い込み、高ぶる姿も、聖書は克明に描いています。イザヤ書には、アッシリアが自分自身に力があるとうぬぼれて、それで裁かれる預言があります。ダニエル書には、バビロンの王ネブカドネツァルが、自分に栄光があるとうぬぼれて、獣のようにされました。これらの高ぶりの背後に、悪魔がいます。

ですから、国々が一つとなり、神とキリストに反抗することが、キリストの御国が建てられる前に起こることが、詩篇第二篇に預言されているのです。「詩 2:1-3 なぜ国々は騒ぎ立ちもろもろの国民は空しいことを企むのか。2 なぜ地の王たちは立ち構え君主たちは相ともに集まるのか。【主】と主に油注がれた者に対して。3 「さあ彼らのかせを打ち砕き彼らの綱を解き捨てよう。」」黙示録 16 章に、国々が獣から出た霊におびき出されて、ハルマゲドンに集まることが預言されています。

私たちは今、主が国々を揺り動かし、ご自身が神であることを明らかにする時代に生きています。ハガイの預言です。「2:21b-22 わたしは天と地を揺り動かし、22 もろもろの王国の王座を倒し、異邦の民の王国の力を滅ぼし尽くし、戦車とその乗り手をくつがえす。馬とその乗り手は味方の剣によって倒れる。」天地が、自然が揺り動かされています。そして国々が、世界中で揺り動かされています。主ご自身がそれら反抗する勢力を滅ぼされ、彼らをご自身に従わせるのです。

そして私たちが励まされるのは、主は、こういった将来の幻を、あたかも既に起こったかのように、先取りして教えてくださることです。私たちの信仰は、勝利から始まり、その勝利に向かって今を、逆算して生きていると言ってよいのです。

16 すると、神の御前で自分たちの座に着いていた二十四人の長老たちが、ひれ伏し、神を礼拝して言った。

久しぶりに登場していますが、神の御座の周りにいる、二十四人の長老たちです。4 章と 5 章で、ヨハネが天に引き上げられてみた、御座の幻に、長老たちがそこにいて、金の冠を差し出して、主を礼拝している姿がありました。また 7 章でも、数多くの、殉教した聖徒たちが天にいるところで、礼拝を献げています。

17「私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神である主よ。 あなたは偉大な力を働かせて、王となられました。

長老たちは、感謝しています。まず、神の永遠を宣言しています。そして、「全能者」です。どんなことも、不可能ではない方です。その方が、「偉大な力を働かせて、王となられました」と宣言しています。二人の証人には、この偉大な力が働いていました。そして神は、偉大な力で諸国をくつがえされます。

18a 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました。

「諸国の民は怒りました。」とあります。神の権威に対して、これまで見たように人々が怒ります。闇は光のところに来ようとはせず、むしろ光を憎むのです。これから見ていく姿、12 章と 13 章には、それぞれ神の民が諸国の怒りを受けているところを見てきます。イスラエルが、竜によって滅ぼされそうになっている幻が 12 章に、イエスを証ししている者たちが獣の像を拝まずに、殺されていくのが 13 章にあります。

しかし、そのことに対して「あなたの御怒りが来ました。」とあります。神が、諸国の民が神の証しに怒っていることに対して、神ご自身が御怒りをもって臨まれるということです。黙示録 16 章における鉢の災いが下るところに現れます。パウロが、テサロニケの人たちに証ししたように、です。

「Ⅱテサ 1:6-7 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、
7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」

18b 死者がさばかれる時、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも報いが与えられる時、地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です。」

「死者」とは、不義を行った者たちがよみがえり、最後の白い大きな御座で裁かれて、火と硫黄の池に投げ込まれることです。そして、預言者や聖徒たち、御名を恐れる者たちに対する報いがあります。これは、黙示録 18 章、大バビロンに対する裁きで強調されています。さらに、「地を滅ぼす者たち」とありますが、獣を始め、地上を荒らす者たちをご自分の口から出る剣で滅ぼしてくださる、ということです。

2B 契約の箱からの稲妻 19

19 それから、天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた。すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。

地上における幕屋は、天にあるものの写しであり、模型であることを以前、学びました（ヘブル 10:1）。ここは天そのものであり、実体であります。8 章において、香壇も出て来ました。ここでは、「契約の箱」が見えています。ここでは、主ご自身がその中心の部分から直接、その聖にしたがって地上に御怒りを下されるということです。16 章の七つの鉢の災いに、御怒りの極みに達した姿を見ることになります。そして、神殿の中から、稲妻、雷鳴、自身、大粒の雹が落ちています。主ご自身が今、天からの栄光をもって偉大な力を、このような形で現わされるのです。

私たちが、この偉大な力を証しする者たちとして立てられました。二人の証人のような奇跡を行うことはないかもしれませんが、けれども、神の力によって、すべての人が憎んでも、証しするのです。多勢に無勢ではありません。たった一人でも、多くの人たちに神に向き合う機会を与えます。